

サポートした方々から見た金子さんの終活

最後に金子さんのエンディングノートを実践するにあたり大事な役割を果たしたおふたりにお話を伺いました



宮崎美津子さん

東京・深川の葬儀社「セレモニーみやざき」社長。地元の葬儀をはじめ、口コミで著名人の葬儀の依頼も多数。「金子さんは下町・深川がお好きと知り、ご縁を感じました」

金子さんが希望したこと

参列者への気配り

通夜ぶるまいの料理は、金子さんが味に太鼓判を押すお店のものに。東京タワーに近いお寺との縁も、「参列してくれる人が来やすい都心の場所で」との思いが引き寄せました

霊柩車にこだわる

流通ジャーナリストらしく霊柩車のランクをリサーチし、「妻との最後のデートだから」と輸入車を選びました。「一緒に乗ろうね」と奥さまに話しかけていたそうです

「自分の「死」にまつわることなのに、作業中、喜んでくれている相手の顔を思い浮かべて、笑みさえこぼれた。」

【※「僕の死に方 エンディングダイアリー-500日」 P.130より】

金子さんの生き方と
同じ目線の葬儀を
心がけました

金子さんから依頼を受け、ともに葬儀の準備をしたのが、セレモニーみやざきの宮崎美津子社長。葬儀がとり行われ、金子さんの終の住処となった心光院を紹介したのも宮崎さんでした。「金子さんのおつき合いは約1か月でしたが、中身の濃い日々で、深く心に刻まれていきます。最初にご本人の葬儀と聞いたときは、それは驚きましたよ。金子さんはすでに自分でいろいろ調べていて、わからないことはこちらに質問しながら、お料理は、霊柩車は、祭壇は…とひとつひとつ決めていきました」

人との関係を大切にする金子さんは、葬儀についても「いらしてくれただ方に無礼がないこと」をいちばんに考えていたそう。その思いを受け、「金子さんの生き方と同じ目線の葬儀になるよう、心を配りました」と宮崎さん。「皆さんにお礼を言いたい」との願いは、本人による会葬礼状という形になりました。金子さんと宮崎さんの信頼関係を象徴するのが、告別式での出来事です。出棺を待つ大勢の参列者全員に、急きよ棺にお花を入れてもらうことになり、「異例のことでしたが、出棺を1時間遅らせて対応しました。金子さんが望んだ皆さんとお別れするというのができたのでは、と思っています」。

金子さんは亡くなる前日の夜、宮崎さんと対面し、お礼の気持ちを伝えます。そして、「41歳、悔いのない人生でした。僕も怖いのではないです」と。「お送りする立場の私たちですが、金子さんにたくさんのご恩を教わりました。終活」とは、その人の生き方そのものなのではないでしょうか